DOI: 10.57461/nujlp.302.2

研究ノート

ノンヒューマンとのデモクラシー論の対立軸
――動物・自然・モノ

中　矢　勇　二

目次

序論
第 1 節　3 つの理論的アプローチと代表的文献
第 2 節　ノンヒューマンとのデモクラシー論の論点
第 3 節　論点（1）ノンヒューマンの包摂
第 4 節　論点（2）ノンヒューマンのエージェンシー
第 5 節　論点（3）民主主義理論の再考
結論

序論

民主主義は、人間だけのものであろうか。従来の民主主義理論では、民主主義の担い手は人間のみであるという前提が自明視されてきた。こうした前提は、現代民主主義理論のなかでも、特に自由民主主義の理論潮流に顕著である。自由民主主義の「自由」を構成するリベラリズムの思想は、一方で、人間を自然から切り離して主体として位置づけ、他方で、人間ならざるものを、自由などの目的達成のための道具的手段に落とし込んできた、あるいは人間のドラマが繰り広げられる背景として排除してきたと指摘されている（Eckersley, 2004, pp. 104-108, 2017, pp. 990-991）。同様のことは、その他の現代民主主義理論にもあてはまる。ペイトマンの職場民主主義、ハーバーマスの熟議民主主義、ラクラウやムフの闘技民主主義といった民主主義の根源化を目指す議論においても、民主主義に関与する政治的主体は、あくまで人間に限定されてきた（Asenbaum et al., 2023, pp. 584）。

例えば、ハーバーマスの熟議民主主義においては、理性的な政治的コミュニケーションに関わることのできる特定の人間主体が想定されており、その裏返しとして、ノンヒューマンの排除が自明視されている（Dryzek, 2000, p. 148; Eckersley, 1992, pp. 109-117; Meijer, 2019, pp. 216-217）。これらの現代民主主義理論の視座は、人間を民主主義の唯一の政治的主体として位置づけているのである[1)]。

しかしながら、近年、そうした前提を乗り越えようとする民主主義理論が萌芽的に登場しつつある[2)]。こうした新しい民主主義理論の潮流によれば、政治や民主主義に参加してさまざまなエージェンシーを行使することは、人間だけでなく、次のようなノンヒューマンにも見出しうることである。すなわち、人間以外の動物（Donaldson, 2020; Donaldson et al., 2021; Meijer, 2019）、自然（Dobson, 2010, 2014; Dryzek, 2000; Dryzek & Pickering, 2019; Romero & Dryzek, 2021; Smith, 2017; 前田, 2021）、ウイルス（Kurki, 2020; 前田, 2021）、仮面[3)]（Asenbaum, 2023）、デジタル・テクノロジー（Asenbaum, 2021）などである。

たしかに、これらのノンヒューマンに、人間のような意思や目的を伴った狭義のエージェンシーを見出すことは難しい。しかし、上記の論者らによれば、ノンヒューマンにも、行為能力を通じてさまざまな影響を与えるという意味での広義のエージェンシーを発見することはできる。そしてそうしたエージェンシーは、一方では、権力（Donaldson et al., 2021; Meijer, 2019）、植民地化（Dryzek, 2000; Plumwood, 1995 も参照）、対立（前田, 2021）などの契機において政治性を帯びる潜在的可能性があり、他方では、

1）　従来の民主主義において想定されてきた「人間」が、しばしば一部の「特定の人間」（例えば、白人・男性・健常者・異性愛者など）のみを反映しており、それゆえに「その他の人間」を周縁化してきたことは、民主主義における政治的主体像の狭さを想起する上で重要である（例えば、Young, 2000 を参照）。

2）　2024 年 2 月 20 日、政治学者ジョン・ドライゼクなどが所属するオーストラリアの「熟議民主主義とグローバル・ガヴァナンス研究センター」において、センター 10 周年記念の連続セミナーの第一回目として、「いかに熟議民主主義はノンヒューマンに傾聴しうるか？」というテーマのイベントが実施された。このように、ノンヒューマンをめぐる関心は、民主主義理論家のあいだで高まりつつあり、今後、本格的に議論されていくことが予期されている。

3）　ここでの「仮面（mask）」は、抗議運動などにおいて匿名性を確保するために身につけられる帽子やフードなどを指す。例えば、ロシアのフェミニスト・バンク・ロック集団「プッシー・ライオット」のカラフルな目出し帽や、「ブラック・ライヴズ・マター」運動のフードなどである（Asenbaum, 2023, pp. 96-97）。

民主的主体を再構成したり（Asenbaum, 2021, 2023）、非言語的なシグナルを発信したりする（Dobson, 2010, 2014; Dryzek, 2000; Dryzek & Pickering, 2019; Romero & Dryzek, 2021; 前田, 2021）など、政治や民主主義の文脈において重要な役割を果たしうる。つまりノンヒューマンは、政治や民主主義の外側で客体として沈黙しているのではなく、むしろエージェンシーを通じて政治や民主主義に積極的に関与しているのである。このような意味で、ノンヒューマンは、ある種の「政治的主体」として位置づけられる。

本稿は、そのように政治に関与するノンヒューマンのエージェンシーを認めた上でノンヒューマンを政治的主体として包摂しようとする民主主義を、「ノンヒューマンとのデモクラシー」と呼ぶ[4)]。本稿の目的は、こうしたノンヒューマンとのデモクラシー論の研究動向を整理することにある[5)]。そのために本稿は、次の 2 つのことに取り組む。第 1 に、ノンヒューマンとのデモクラシー論を、研究の文脈に沿って 3 つの理論的アプローチに整理しながら、それぞれの代表的な文献を紹介する（第 1 節）。ここで各研究の文脈に沿った理論的アプローチを軸にするのは、ノンヒューマンとのデモクラシー論が、いくつかの研究の文脈において異なる問題関心をもちながら別々に展開されているという実態を反映するためである[6)]。特

4）　ここでの「ノンヒューマンとのデモクラシー」という概念は、前田（2021）に依拠している。前田は、「ノンヒューマンとのデモクラシー序説」と冠する論文において、「ノンヒューマンとのデモクラシー」を以下のように捉える。すなわち、人間だけでなくノンヒューマンをも政治的主体として位置づけながら、ノンヒューマンからのシグナルを「声」として拾い上げていく民主主義である。

5）　ノンヒューマンとのデモクラシー論の研究動向の検討は、前田（2021）によってすでに行われている。この前田（2021）の検討作業との関係において本稿を位置づけるならば、本稿は、前田による検討作業を、次のような 4 つの補足を通じて発展させるものとして理解される。1 つ目は、前田が検討した「エコロジー的民主主義」と「ニューマテリアリズムの民主主義（広くはオブジェクト指向の民主主義）」に加えて、「インタースピーシーズな民主主義」を、ノンヒューマンとのデモクラシー論の 1 つとして論じる点である（田村，2023 も参照）。2 つ目は、エコロジー的民主主義の潮流を人間対人間の熟議として理解する向き（前田，2021，pp. 333-336）に対して、ドライゼクの議論を参照することにより、自然をある種の政治的主体として扱った上で、人間とノンヒューマンとのコミュニケーションを基礎にしたラディカルな熟議民主主義理論の構想が潜在的にはありうることを強調する点である（Dryzek, 2000）。3 つ目は、ベネットの議論を取り扱う際に、ニューマテリアリズムに固有の観点に光をあてることで、民主主義の存在論を刷新するプロジェクトを描き出す点である（Bennett, 2010）。4 つ目は、上記の 3 つの民主主義の理論的アプローチを比較・検討することで、ノンヒューマンとのデモクラシー論に対立軸が潜在していることを明らかにする点である。

6）　異なる文脈で展開されているのであれば、そのまま別々の文脈で個別に議論されればよいのではないかという考えもありうる。しかし、本稿が「ノンヒューマ

に本稿は、動物の権利の政治理論の文脈から①インタースピーシーズな民主主義、環境政治理論の文脈から②エコロジー的民主主義、ニューマテリアリズムの観点を採用する政治理論の文脈から③ニューマテリアリズムの民主主義を取り上げる[7)]。第 2 に、それらの理論的アプローチの間にある対立関係を明示しながら、(1)「ノンヒューマンの包摂」、(2)「ノンヒューマンのエージェンシー」、(3)「民主主義理論の再考」という論点に沿って、代表的文献を検討する（第 2 ～ 5 節）。以上のようにして、ノンヒューマンとのデモクラシー論の研究動向をつかむことを目指す[8)]。

ンとのデモクラシー」論としてまとめて論じる理由は、第 1 に、現代においてノンヒューマンをある種の政治的主体として捉えながら、人間に限定された民主主義理論を乗り越えようとする共通の波が立ち上がりつつあるからであり、第 2 に、そうしたノンヒューマンとのデモクラシーのあり方をめぐって、複数の理論的アプローチがそれぞれの視座から提供するオルタナティブな議論をあえて突き合わせることで、それぞれの理論的立場を明確化し、また潜在的に対立する論点から新たな洞察を獲得しうるからである。

7） 本稿で使用する用語に関して、以下のことに留意されたい。第 1 に、「インタースピーシーズな民主主義（interspecies democracy）」という用語に関してである。「インタースピーシーズ」という概念自体は、人間や動物に限らず、植物、菌類、無生物などを幅広く指しうる（Donaldson et al., 2021, p. 73）。しかし、「インタースピーシーズな民主主義」という用語のもとに議論されているのがもっぱら動物のみである研究状況を踏まえて、本稿は、「インタースピーシーズ」の範囲を動物に限定されるものとして扱う。第 2 に、「エコロジー的民主主義（ecological democracy）」という用語に関してである。これには、「緑の民主主義（green democracy）」という呼び方もあったが、本稿では「エコロジー的民主主義」に統一する。その理由は、近年では「エコロジー的民主主義」と呼ばれることが多いこと、また「緑の民主主義」という呼び方が「緑の党」をめぐる議論を誤ってイメージさせることである。第 3 に、「ニューマテリアリズムの民主主義」という用語に関してである。ニューマテリアリズムの観点から論じる民主主義は、インタースピーシーズな民主主義（interspecies democracy）やエコロジー的民主主義（ecological democracy）とは異なり、現時点では確定した呼称が存在していない。しかし、アセンバウムらのプロジェクトの立ち上げを考慮すれば、ニューマテリアリズムという観点から構想される民主主義は、十分に 1 つの理論的アプローチとして名づけられてよいと思われる（Asenbaum et al., 2023）。よって、本稿は、こうしたアプローチを「ニューマテリアリズムの民主主義」と呼ぶことにした。

8） なお、本稿が取り扱わないノンヒューマンとのデモクラシー論として、次のようなものもある。ひとつは、哲学、文化・社会人類学、科学技術社会論（STS）などにおいて学際的に活躍したブルーノ・ラトゥールによる、「アクターネットワーク理論」の観点から論じられる民主主義理論である（Latour, 2004; 前田, 2021 や栗原編著, 2022 も参照）。この理論的アプローチは、オブジェクトのエージェンシーへの注目という点でニューマテリアリズムの民主主義理論に近いため、まとめて「オブジェクト指向の民主主義」と扱われることもある（前田，2021，p. 344）。もうひとつは、人間と動物との関係性の研究などで著名なダナ・ハラウェイの影響を受けながら、2010 年以降に登場した「マルチスピーシーズ民族誌／人類学」の観点から構想が模索されている民主主義理論である（福永，2023；近藤・吉田，2021 も参照）。この理論的アプローチは、「人間と他種（さらには生物種に

もっとも、こうしたノンヒューマンとのデモクラシー論の意義はどこにあるのか、という疑問も生じるかもしれない。筆者の問題意識を明確にするためにも、この点について述べておきたい。なぜノンヒューマンとの民主主義なのであろうか。言い換えれば、なぜ人間に限定された既存の民主主義理論に、あえてノンヒューマンを政治的主体として包摂していかなければならないのであろうか[9)]。実際、これまでのほとんどの民主主義理論は、そうしたノンヒューマンを無視して済ませてきた。したがって、人間に限定されない民主主義を構想する理由が説明されなければならないであろう[10)]。

この疑問に対して、政治学者ドライゼクの言葉を借りて応答するならば、人間主体のみが民主主義を独占する「人間中心主義的な傲慢」がもはや通用しない時代になりつつあるからである（Dryzek, 2000, p. 6）。「第 1 節　3

とどまらず、ウイルス、精霊、機械、モノ、地形も含む）の絡まりあい」（近藤・吉田，2021，p. 13）という相互依存的で豊かな人間とノンヒューマンの関係性に注目した上で、「人間以外のものたちとの政治はいかに可能か」を探究しようとする（福永，2023，p. 124）。上記のアクターネットワーク理論、そしてマルチスピーシーズ民族誌／人類学の観点を採用する理論的アプローチは、ニューマテリアリズムの立場と近いため、本稿では、政治理論・民主主義理論としての考察が最も進んでいるニューマテリアリズムを取り上げることにした。

9）「そもそもなぜノンヒューマンを包摂するのか」という問いは、手続き的正統性や実質的帰結などの価値をめぐる規範的政治理論の考察として理解されよう。こうした研究は、ノンヒューマンとのデモクラシー論を擁護する上で重要なものである。しかし、そうした規範性をめぐる議論は、研究の文脈によって応答の方向性が異なっており、また研究の文脈内においても論争的であるため、本稿の紙幅でそうした議論状況を正確にまとめるのは筆者の能力を超える。したがって、本稿は、そうした検討を今後の課題としつつ、「既存の民主主義理論がいかに再考されうるか」という民主主義理論的な問題関心に射程を限定している。とはいえ、「なぜノンヒューマンを政治的主体として包摂しなければならないのか」という問いへの応答を全く提示しないのでは、当該研究テーマの意義や重要性を説明したことにならないだろう。したがって、本稿は、この問いへの応答として、ノンヒューマンとのデモクラシー論として最大公約数的に共有されている部分を明らかにしていく。

10）こうした問いを検討していく上で、例えば、次のようなセレマイヤーの整理は参考になる（Celermajer, 2024）。つまり、ノンヒューマンの包摂には、被影響者原理（all affected principle）と実質的な目標（substantial goals）の 2 つの根拠が考えられる。特に後者の実質的な目標として、以下の 3 つがありえる。すなわち、①生態学的システムを守ること、②ノンヒューマンの利害を人間から守ること（セレマイヤーは、nonhuman という言葉使いに潜む人間中心主義に批判的であり、人工物を除いた earth others という概念を使用する）、そして③人間による階層的な存在論から絡み合った関係性の存在論へと移行することである。本稿が取り上げる文献を、以上の整理に即して位置づけるならば、ドライゼクは①、メイヤーは②、ベネットは③に重心があると理解できる。

つの理論的アプローチと代表的文献」にて後述するように、本稿で取り上げる論者たちの問題意識は、次のようなさまざまな現代的諸課題にある。すなわち、人類活動による地球システムの不安定化とそれに伴う生息可能性の縮減、動物の搾取をめぐる倫理的・経験的知見からの挑戦とそれに伴う人間を特権視する自明性の崩壊、気候変動やデジタル技術などを含むさまざまなモノの影響力の増大とそれに伴う人間の認識枠組みの限界の露呈などである。そしてこれらの課題が、規範性あるいは実質性の方向性のちがいにもかかわらず、共通して示唆しているのは、現代において人類はノンヒューマンのエージェンシーと真剣に向き合うことを余儀なくされつつあるということであり、したがって政治の文脈においてもノンヒューマンのエージェンシーを考慮していく要請が大きくなっているということである[11)]。そのような認識に立脚して、ノンヒューマンとのデモクラシー論は、政治の領域からノンヒューマンを排除してきた人間中心主義的な枠組みを見直しながら、ノンヒューマンとのコミュニケーションの契機に注意を向けることによって、政治的回路を通じた諸課題への対応を構想している。こうした政治理論的アプローチによる課題解決の潜在性を考慮すれば、本研究テーマには固有の意義が認められよう[12)]。

11）注 9 で述べたように、本稿はこうした議論に踏み込まない。しかし、これらの諸課題への対応が、政治・民主主義の文脈でノンヒューマンの「声」を考慮することを要請しているかどうかは論争的であることには言及しておきたい。例えば、地球システムの不安定化という人新世的な課題に対して、テクノロジー楽観論的な議論（明るい人新世）も提起されており、この立場からすれば、これまでの政治のあり方を考え直す必要性はそもそもない。また、政治の変革が求められるとする立場からしても、ノンヒューマンをある種の政治的主体として包摂せずとも、人間の間で環境ガバナンスを実施することで対応しようとする議論もありえる。しかし、それでは不十分であると考えるのが、本稿の取り扱うノンヒューマンとのデモクラシー論の立場である（こうした議論は例えば以下に詳しい、Dryzek & Pickering, 2019; 福永, 2023; 前田, 2023）。

12）こうした先端的な民主主義研究は、海外を中心に展開されており、日本では当該研究テーマに取り組む先行研究が不足している。日本の研究動向を、本稿が取り扱う理論的アプローチに沿って説明すれば、以下のようになる。①インタースピーシーズな民主主義に関する日本における検討・論稿は、政治的主体としてのノンヒューマンに焦点を当てているかどうかにかかわらず、管見の限りほとんど存在しない（例外として、田村，2023）。また、ノンヒューマンを政治的主体として論じる、キムリッカとドナルドソンの『人と動物の政治共同体――「動物の権利」の政治理論』（青木・成廣監訳，2016）が海外における研究の紹介として出版されているが、日本の政治理論分野において全くと言っていいほど取り上げられてこなかったように思われる（例外として、土佐，2020）。②エコロジー的民主主義は、一部の政治学者によって論じられているほか（前田，2021；丸山，2006，2021）、政治学を専門としない研究者によって単発的に検討作業も行われ

第 1 節　3 つの理論的アプローチと代表的文献

本稿は、「ノンヒューマンとのデモクラシー」論として、次の 3 つの理論的アプローチを取り扱う。すなわち、①インタースピーシーズな民主主義（動物）、②エコロジー的民主主義（自然）、③ニューマテリアリズムの民主主義（モノ）である（表 1 を参照）。以降では、それぞれの理論的アプローチを研究の文脈に沿って概観しながら、代表的文献を紹介していく。

（表 1）

理論的アプローチ	代表的文献
①インタースピーシーズな民主主義	Eva Meijer（2019）. *When Animals Speak: Toward an Interspecies Democracy*. New York University Press.
②エコロジー的民主主義	John S. Dryzek（2000）. *Deliberative Democracy and Beyond: Liberals, Critics, Contestations*. Oxford University Press.
③ニューマテリアリズムの民主主義	Jane Bennett（2010）. *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things*. Duke University Press.

まず、①インタースピーシーズな民主主義とは、動物（nonhuman animal）に対する暴力や搾取といった問題を背景に、2010 年ごろから「動物の権利の政治理論」の分野における政治学者を中心に取り組まれてきた民主主義理論を指している（Donaldson, 2020; Donaldson & Kymlicka, 2011, 2014; Donaldson et al., 2021; Meijer, 2016, 2019）。この民主主義は、哲学者トム・レーガンなどを代表とする「動物の権利」論による次のような基本的主張

てきた（桑田，2005；瀧，2011；増渕，2012）。また、ロビン・エッカースレイの翻訳書『緑の国家――民主主義と主権の再考』（松野 監訳，2010）をはじめ、アンドリュー・ドブソンやロバート・グッディンの翻訳書など、海外の代表的文献の翻訳作業が実施されてもいる。ただし、本稿のように政治的主体としてのノンヒューマンに焦点を当てている議論、すなわちノンヒューマンとのデモクラシー論にあたる議論は依然として少ない（例外として、瀧，2011；前田，2021）。③ニューマテリアリズムの民主主義に関しては、ニューマテリアリズム思想の紹介・検討はあるが（例えば、川村，2020；佐藤，2021）、政治理論・民主主義理論としての論稿はほとんど見当たらない（例外として、前田，2021）。以上のように、本研究テーマに取り組む先行研究が日本において欠如していること、そして前述した現代における本研究テーマの潜在的意義を踏まえれば、前田（2021）や田村（2023）に続いて、本稿が当該研究動向を再整理することで、本研究テーマへの入り口を設定するということにも一定の価値は認められよう。なお、本稿は本研究テーマの一側面をごく限定された範囲で論じるものであり、日本においてさらなる研究が求められていることは言うまでもない。

に賛同する（Donaldson & Kymlicka, 2011, 2014; Meijer, 2019）。すなわち、主観的な世界を経験する知覚生物であるがゆえに、動物は道徳的権利を有する倫理的共同体の構成員として人間と同様に扱われるべきだという主張に賛同する。このような動物を倫理的に保護する文脈を引き継ぎながらも、インタースピーシーズな民主主義は、倫理的共同体の構成員としてのみではなく、政治的共同体の構成員としても動物を位置づけながら、人間と動物の政治的関係性を考察する点で、議論の焦点を倫理から政治へと移行させている（Donaldson & Kymlicka, 2011, 2014; Meijer, 2019）。こうして、インタースピーシーズな民主主義は、政治に人間以外の動物を迎え入れながら、人間を含めたさまざまな動物から構成されるインタースピーシーズな共同体において、いかに共生することができるかを問題とするのである（Meijer, 2019, p. 2, pp. 115-118）。

この点をめぐって、動物のエージェンシーを重視するかどうかで民主主義理論の方向性は分枝してきた。つまり、一方では、政治的エージェンシーを、人間の政治制度に意思や目的をともなう形で影響を与えるという狭義の意味に制限した上で、そうした政治的エージェンシーをもたない「政治的患者（political patients）」として動物を捉えて、人間が動物の利害を代表しようとする民主主義理論がある（Donaldson et al., 2021, p. 74, pp. 81-84）。他方では、政治的エージェンシーを、社会における人間と動物の権力構造を背景とした政治的実践という広義の意味で捉えた上で、そうした政治的エージェンシーをもつ「政治的行為能力者（political agents）」として動物に注意を向ける民主主義理論が構想されている（Donaldson, 2020; Donaldson et al., 2021, pp. 78-80; pp. 81-84; Meijer, 2016, 2019）。しかしながら、前者を「ノンヒューマンのためのデモクラシー」、そして後者を「ノンヒューマンとのデモクラシー」と区別できるほどに、両者は異なる方向性を有している。つまり、前者は、人間がノンヒューマンのために政治や民主主義を行うと考えることで、政治や民主主義をもっぱら人間固有の領域として設定する既存の枠組みを踏襲している。そのため、そこではノンヒューマンの潜在的な声は依然として排除されている。逆に、後者において、人間がノンヒューマンと政治や民主主義を行うというのは、ノンヒューマンのエージェンシーに特有なさまざまな表現や行為のあり方を受け止めて、それをもとに既存の枠組みを再考することを含意している。本稿の関

心は、「政治的主体」としてのノンヒューマンの包摂を契機とする、民主主義理論の捉え直しにある。そのため、本稿では前者ではなく、後者に焦点を当てていく[13]。特に、後者の立場に立脚しながら、インタースピーシーズな民主主義理論を比較的体系立てて検討している、エヴァ・メイヤーの *When Animals Speak: Toward an Interspecies Democracy* を代表的文献として取り上げたい。

次に、②エコロジー的民主主義とは、国境を越えて深刻化するエコロジー的危機を背景に、1990 年ごろから環境政治理論の分野における政治学者を中心に発展されてきた民主主義理論を指す（Dobson 2014; Dryzek, 1987, 2000; Dryzek & Pickering, 2019; Eckersley, 2004, 2020; Lysaker, 2024; Pickering, Bäckstrand & Schlosberg, 2020）。近年では、「人新世」の問題提起を受け止めながら、エコロジー的民主主義をさらに発展させようとする動きがある（Dobson, 2022; Dryzek & Pickering, 2019; Eckersley, 2017; Lysaker, 2024）。エコロジー的民主主義には、エコロジー的結果と民主的プロセスの合致の問題（Goodin, 1992）、エコロジーの破壊に加担する自由民主主義批判（Eckersley, 2004）など、さまざまな論点がある。「ノンヒューマン」をテーマにする本稿にとって特に重要なのは、いかに自然（nonhuman nature）を包摂するかという問題である。

この点をめぐって、自然のエージェンシーを重視するかどうかで、エコロジー的民主主義の方向性は分岐してきた。一方では、人間の政治においては自らの利害を語れないものとしてノンヒューマンのエージェンシーを否定した上で、人間が自然の利害を代表しようとする熟議民主主義が存在する（Ball, 2006; Eckersley, 2004; Goodin, 1996）。他方では、政治に参加しうる自然のエージェンシーを強調して、こうした自然からのシグナルを傾聴しようとする熟議民主主義が構想されている（Dryzek, 2000; Dryzek & Pickering, 2019; Dobson, 2010; Romero & Dryzek, 2021）。たしかに、どちらも熟議民主主義にノンヒューマンとしての自然を包摂しようとしてはいる。しかし、前者が、基本的には既存の枠組みのなかで「ノンヒューマン

13）後者の「ノンヒューマンとのデモクラシー」を志向する議論は、ノンヒューマンのエージェンシーを強調して既存の民主主義理論の捉え直しに向かうが、それは人間がノンヒューマンの「声」を媒介・代表する契機を必ずしも否定するわけではない。重要なのは、ノンヒューマンのエージェンシーを受け止めて、人間に限定された政治や民主主義の枠組みを問い直しているかどうかである。

のためのデモクラシー」の方向性を目指すのに対して、後者は、自然を排除する既存の枠組み自体を問い直しながら、「ノンヒューマンとのデモクラシー」の方向性を志向している。

先ほどのインタースピーシーズな民主主義の場合と同様に、本稿は、ノンヒューマンを政治的主体として捉える後者に焦点を当てる。特に、この立場からエコロジー的民主主義を牽引してきたジョン・ドライゼクの理論的基礎が完成したとされる（丸山，2021，p. 51）、*Deliberative Democracy and Beyond: Liberals, Critics, Contestations* を、エコロジー的民主主義の代表的文献として取り上げたい。

最後に、③ニューマテリアリズムの民主主義とは、哲学・思想分野において関心を集めるニューマテリアリズムの観点を採用して、さまざまなモノがもつエージェンシーを軸に、人間とそれ以外という二元論的な民主主義の枠組みを乗り越えようとする民主主義の潮流である（Asenbaum, 2021; Asenbaum et al., 2023; Bennett, 2010; Connolly, 2019; Smith, 2017; 前田, 2021）。ニューマテリアリズムの観点から現代民主主義理論を再検討するプロジェクトを立ち上げた政治学者のアセンバウムらは、ニューマテリアリズムを以下のように捉える（Asenbaum et al., 2023, p. 585）。すなわち、それは「人間によって作用されるだけでなく、それ自体が活動的で生産的で予測不可能な『活力あるモノ』として、世界を描き出す」理論である（Bennet, 2010; Connolly, 2013; Coole & Frost, 2010）。そのようにして、人間、動物、自然、人工物などを横断するノンヒューマンが、エージェンシーを発揮する活力ある「モノ（物質、matter）」として捉えられる。

この潮流は、ベネット（Bennett, 2010）やコノリー（Connolly, 2013）などのニューマテリアリズムの旗手による政治や民主主義への接続に端を発して、さまざまな民主主義理論家によって発展されつつある（Asenbaum, 2021; Asenbaum et al., 2023; Smith, 2017; 前田, 2021）。ただし、そうしたノンヒューマンへのラディカルな関心ゆえに、ニューマテリアリズムと一般的な現代民主主義理論との間には溝があり、まだ十分に関連づけて検討されていないことも事実である（Asenbaum et al., 2023）。そこで本稿では、熟議モデルや闘技モデルといった現代民主主義理論に直接的に接続はしていないものの、ニューマテリアリズムの民主主義を切り拓いた一人であるジェーン・ベネットの *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things* を取り上

げたい。

第２節　ノンヒューマンとのデモクラシー論の論点

上記の理論的アプローチの記述において示唆されているように、それぞれの理論的アプローチの間には一定の距離感がある。さらに踏み込んで言えば、それらの理論的アプローチの間には、相互に対立する論点が潜在している。この論点に沿って代表的文献の議論を比較していくことは、それぞれの理論的アプローチを適切に位置づけることを可能にし、ノンヒューマンとのデモクラシー論研究の発展に貢献するであろう。したがって、本稿は、「ノンヒューマンの包摂」、「ノンヒューマンのエージェンシー」、「民主主義理論の再考」という 3 つの論点に沿って、代表的文献を検討していくこととする。

結論を先取りすれば、以下のようになる（表 2 を参照）。第 1 に、「ノンヒューマンの包摂」という論点では、包摂されるノンヒューマンとして、メイヤーは「動物」、ドライゼクは「自然」、ベネットは「モノ」を提示する。ここでは、どこまで包摂するかをめぐって、「動物」＜「自然」＜「モノ」という射程の広さに相違点があり、さらに人間のように権利を有する存在として包摂するかをめぐって、メイヤー対ドライゼク＋ベネットという対立軸が存在している。第 2 に、「ノンヒューマンのエージェンシー」という論点では、特定されるエージェンシーとして、メイヤーは「動物の発話や行為」、ドライゼクは「自然の生態学的プロセス」、そしてベネットは「アッサンブラージュ（アセンブリッジ、assemblage）におけるモノの影響」を提出する。これらの論者は、上記のノンヒューマンからの働きかけをそれぞれコミュニケーションの契機として捉える点で共通している。しかし、コミュニケーション形態を軸に比較すれば、メイヤーが動物のエージェンシーを広義の「言語」的コミュニケーションとして（形態 1 ＋ 2）、ドライゼクが自然のエージェンシーを非言語的コミュニケーションとして（形態 3）、そしてベネットがモノのエージェンシーをモノの非言語的コミュニケーションとして（形態 3）捉えている。とりわけ、自然のエージェンシーを政治に関与するコミュニケーションとして包摂／排除するかをめぐって、メイヤーとドライゼクの間で明確な対立関係が生じている。第 3

に、「民主主義理論の再考」という論点では、一方のメイヤーとドライゼクがノンヒューマンとのコミュニケーションを熟議に包摂することで「熟議民主主義の拡張」を目指す点で共通しているのに対して、他方のベネットは存在論の次元から民主主義の捉え直しを志向することが示される。この民主主義の存在論に焦点を当てるならば、メイヤーは人間の枠組みを維持している意味で保守的であり、ドライゼクは存在論を再考する潜在的可能性をもっており、ベネットはラディカルにこれを追求していると言える。以下では、これらに関して、より詳細に述べていく。

（表２）

論点＼理論的アプローチ	メイヤー ①インタースピーシーズな民主主義	ドライゼク ②エコロジー的民主主義	ベネット ③ニューマテリアリズムの民主主義
(1) ノンヒューマンの包摂	動物 [＝主観的動物＋α] 射程：△ 権利：○	自然 [＝自然システム] 射程：○ 権利：×	モノ [＝活力あるモノ] 射程：◎ 権利：×
(2) ノンヒューマンのエージェンシー	動物の発話や行為 コミュニケーション形態：1＋2 動物の「言語」的コミュニケーション	生態学的プロセス コミュニケーション形態：3 自然の非言語的コミュニケーション	アッサンブラージュにおけるモノの影響 コミュニケーション形態：3 モノの非言語的コミュニケーション
(3) 民主主義理論の再考	熟議民主主義の拡張 [＝動物とのコミュニケーションを包摂] 存在論の再考：△	熟議民主主義の拡張 [＝自然とのコミュニケーションを包摂] 存在論の再考：○	民主主義の存在論の再考 [＝アッサンブラージュの存在論] 存在論の再考：◎

第３節　論点（1）ノンヒューマンの包摂

第１の論点は、「ノンヒューマンの包摂」である。まず、メイヤーが民主主義に包摂するノンヒューマンは、「人間ならざる動物（nonhuman animal）」である（Meijer, 2019, p. 2）。ここでの「動物」は、人間以外の哺

乳動物だけでなく、鳥類や魚類、さらにはハチ、カタツムリ、ミミズ、クモなどの無脊椎動物など、幅広い動物を指している（p. 154，p. 159）。一般的な動物の権利の政治理論家は、知覚をもつこと（sentient）、すなわち世界を経験する主観的な（subjective）能力をもつことを、動物の権利の源泉として、ひいては政治的共同体の一員たる規範的根拠として重視してきた（p. 2，p. 154，p. 159）。この帰結として、動物の権利の政治理論において語られる「動物」は、もっぱら哺乳動物、鳥類、魚類などの知覚の存在が経験的に明らかな動物を指すことが多い。ただしメイヤーは、この知覚を道徳的源泉とする議論を踏襲しながらも、それゆえに排除されてきたミミズなどをも「動物」として包摂しようとしている[14)]。このようにして、人間とともに「家庭（household）」、「生息地（habitat）」、「共同体（community）」、そして「惑星（planet）」を共有する、多種多様な動物を権利を有する存在として包摂するのが、メイヤーのインタースピーシーズの民主主義理論の特徴である（pp. 221-222）。

これに対して、ドライゼクが民主主義に包摂するノンヒューマンは、「人間ならざる自然（nonhuman nature）」である（Dryzek, 2000, p. 148）。ここでの「自然」は、「自然システム」（p. 140）や「生態系」（p. 150）といったドライゼクの用語から示唆されるように、生態学的に活動するマクロな自然を指す。実際、ドライゼクが「自然」を語る際には、「入れ子になった社会的システムとエコロジー的システム（nested social and ecological systems）」（p. 123）、「人間社会と自然（human society and non‐human nature）」（p. 148）のように、人間の社会システムと自然システムといったマクロな対応関係が意識されている（Dryzek, 1987 も参照）。ドライゼクの民主主義構想は、こうしたシステミックな次元において捉えられる自然を包摂し、従来の人間社会の境界線内に閉じられた民主主義を乗り越えて、人間と自

14）しかし、このメイヤーの対応は、動物の知覚（sentience）などの「個別的資質の解釈」をめぐる議論から、人間と動物との「関係性（relation）」をめぐる議論へと焦点をずらしている意味で、動物の権利論の枠組みから逸脱している（p. 154，pp. 159-164）。その結果として、ノンヒューマンの射程は、ミミズにとどまらず、植物などの動物以外の生物、さらには海や土壌などの無生物にまで広がることが指摘されている（Milburn, 2022, para. 7）。したがって、動物倫理を出発点としてミミズを切り捨てながら哺乳動物などのみに射程を狭めるか（動物の権利論の方向へ）、動物倫理ではなく関係性を出発点としてミミズを包摂しながら自然やモノなどまで射程を徹底化するか（ベネットの方向へ）、メイヤーはあらためて応答しなければならない。

然の境界線を越境した「自然システムとの有意義な関わりあい」を模索するものである（p. 140）。したがって、ドライゼクが包摂しようとする「ノンヒューマン」は、木や動物といった個別的な自然ではなく、生態学的に結びついて集合的に活動する自然システムと言える。こうしたドライゼクの包摂するノンヒューマンの射程は、人間や動物のような主観的動物を越えて、エージェンシーを発揮する「行為能力者（agents）」としての自然へと幅広く拡張されている（p. 148）。

最後に、ベネットが民主主義に包摂しようとする「ノンヒューマン」は、人間ならざる「モノ（matter）」である（Bennett, 2010, p. vii）。このモノは、あらゆるマテリアルを指し示す概念として使用される。具体例として、ミミズ、食べ物、商品、ゴミ、電気、鉱物、嵐などが挙げられている（p. viii, p. xiii）。したがって、ベネットのノンヒューマンの射程は、動物や自然を越えて、人工物などまでも幅広く含んでいる。彼女がこうしたモノに注目するのは、「世界を鈍いモノ（それ、モノゴト）と活力ある生命（私たち、存在）に分ける」二元論の枠組みを、ニューマテリアリズムの立場から乗り越えるためである（p. vii）。ベネットによれば、モノと生命の隔離によって、一方では私たち主体の生命にはエージェンシーが付与され、他方でそれら客体のモノからはエージェンシーが取り上げられてきた（p. vii）。このような沈黙した客体像に対抗して、ベネットは、ニューマテリアリズムの観点から、特定の政治的な出来事において活動する人間ならざるモノに注目していくのである（p. viii, p. xvi）。

以上のメイヤー、ドライゼク、ベネットにおける「ノンヒューマンの包摂」は、相互に比較することによってさらに明確になる。ここでは特に、「誰を包摂するのか」と「いかに包摂するのか」に着目することで、それらの間の緊張関係を明らかにしながら、それぞれの特徴を掴んでいきたい。

はじめに、「誰を包摂するのか」に関して、その範囲の違いから「人間」＜「動物」＜「自然」＜「モノ」という関係を指摘できる。第 1 に、メイヤーのインタースピーシーズな民主主義は、「人間」だけではなく、人間を含めた「動物」を包摂しようとする。ここでの「動物」は、主観的な世界を経験する個別的動物を基本的に指している。したがって、その包摂の射程は、一方では、既存の人間のみに限定された民主主義よりも拡張されているが、他方で、主観的世界をもたない植物や土壌といった「自然」あ

るいは人工物を含む「モノ」を、政治に関与する主体から排除している点で狭い。第 2 に、ドライゼクのエコロジー的民主主義は、「人間」に加えて、「自然」、つまり生態学的に活動するマクロな自然システムを包摂する。ここでの「自然」は、自然システムの一部として「動物」を位置づけており、その意味で包摂の射程が拡張されていると言える。しかし、ドライゼクにおいては、メイヤーのような個別的な「動物」には焦点が当たっていないことに注意が必要である。また、こうしたドライゼクの「自然」は、人工物にまで視野を広げるものではない。第 3 に、ベネットのニューマテリアリズムの民主主義は、ニューマテリアリズムの独特な観点から、「人間」「動物」「自然」だけではなく、人工物を含めたあらゆる「モノ」を包摂する。こうしたベネットの視点は、人間・動物・自然・人工物を横断する、あらゆる物質としての「モノ」を捉えようとしている点で、包摂の潜在的な射程は最も広い。このベネットの包摂理解は、ドライゼク同様に個別的な「動物」（メイヤー）には焦点を当てていないものの、自然システム（ドライゼク）は射程に収めている。以上のように、「誰を包摂するのか」という観点からの比較を通じて、「動物」＜「自然」＜「モノ」という、包摂範囲の違いを見てとることができるのである。

続いて、「いかに包摂するのか」に関して、人間のようにノンヒューマンに権利を付与するかどうかという対立軸が存在する。つまり、一方でメイヤーは、主観的世界の経験という道徳的根拠を基本的な基準にして、人間ならざる動物を権利の保持者として平等に包摂しようとする。しかし、他方でドライゼクとベネットは、人間のように権利を認めることでノンヒューマンを平等に扱うのではなく、人間とノンヒューマンの密接な連続性や関係性に注目しながら、ノンヒューマンを政治に関わる行為能力者として包摂するにとどめている。このように、メイヤーとドライゼク＋ベネットとの間に、ノンヒューマンへの権利をめぐって明確な対立軸を見て取ることができる。

まず、メイヤーは、人間に対して人間ならざる動物を権利を有する存在として平等に位置づける。本稿が取り上げた文献において、彼女は、個別的な動物に道徳的根拠があること、それゆえに権利が付与されるべきであることを議論の出発点にしている（Meijer, 2019, p. 2）。そこからメイヤーは、人間ならざる動物を権利を有する存在として平等に包摂することを前

提に、人間と動物の政治的関係性へと議論を進めて、ノンヒューマンとのデモクラシー論を構想する。このような動物倫理を出発点にする立論は、人類種による恣意的な動物搾取に問題意識をもつ政治理論家からすれば当然のものであろう。動物は、まずもって殺されたり食べられたりすることから保護されなければならないのであって、その上で初めて、新しい政治的関係性を人間と動物の間で発展させていくことができるのである（p. 116）。メイヤーによるノンヒューマンの包摂のあり方は、政治的主体である以前に権利的主体として最低限の保障が担保される必要があることを主張している点で示唆的である。

これに対して、ドライゼクとベネットは、人間のような権利を有する存在としてノンヒューマンを扱うのではなく、両者において見出される連続性や関係性に焦点を当てながら、ノンヒューマンを政治に関わる行為能力者として包摂する。事実、メイヤーが立脚する動物倫理学の主張とは対照的に、ドライゼクは、人間ならざる諸存在の選好を功利計算に含めたり、人間に対抗するように権利を付与したりすることで、ノンヒューマンを人間のように扱うことに明確に反対する（Dryzek, 2000, pp. 151-152）。ドライゼクにとって、人間とノンヒューマンとの間における平等は、人間を「生態系の構成員（ecosystem members）」（p. 150）として位置づけ直しながら、人間と連続性のある行為能力者として、ノンヒューマンを尊重することにある（p. 148）。このようにしてドライゼクは、政治において行為能力者のエージェンシーが平等に代表されたり傾聴されたりすることを重視するのである（pp. 153-154）。

同様にベネットも、「私たち〔人間〕とそれら〔ノンヒューマン〕が平等に権利を付与されること」を否定する（Bennett, 2010, p. 104.〔〕は引用者による補足）。たしかにベネットは、活力あるモノの視点から、私たちの注意や「尊敬（respect）」をノンヒューマンに向けながら「人の身体の周囲や内部において循環するさまざまなノンヒューマンの力を見出す（視る、聴く、嗅ぐ、味わう、感じる）」（p. ix）ことによって、傲慢な人間像を解体することを唱えている。しかし、ここでのベネットの意図は、人間とノンヒューマンとの間のあらゆる違いを消滅させることにではなく、むしろ人間とノンヒューマンとの密接な関係性を検討することにある（p. 104）。したがって、ベネットは、メイヤーと異なり、人間とノンヒューマ

ンとの間の平等を前提とはせず、それらの間において発生している関係性や相互依存性に注意を向けるに留めるのである（p. 104）。上記のように、ノンヒューマンに権利を付与するかという論点において、メイヤー対ドライゼク＋ベネットという対立軸が存在している。

第４節　論点（2）ノンヒューマンのエージェンシー

第２の論点は、「ノンヒューマンのエージェンシー」である。第１の論点で確認したように、それぞれの論者は、さまざまなノンヒューマンを異なる形で包摂している。そうして包摂されたノンヒューマンは、当然それぞれの行為能力に応じて特有なエージェンシーを発揮することになる。本論点では、「そうしたエージェンシーがいかなるものか」を検討していく。

メイヤーは、動物のエージェンシーが動物の発話や行為に見出されると指摘する。これまで動物は、政治の文脈において声なき客体として排除されてきた（pp. 3-5，pp. 10-12）。この政治における動物の排除には、アリストテレスの政治的動物の定義から、ハーバーマスやロールズなどの現代政治理論にまで通底する、次のようなロゴス中心的な言語観が横たわっている（pp. 3-8）。つまり、「話す」ことを、快苦の声をあげることではなく、正と不正を識別して理性的に発話することとして捉える言語観である（p. 3，pp. 18-23）。こうした人間に特徴的なロゴス的側面を基準にした言語観が前提になることによって、人間のみが「言語」を独占し、動物は「言語」を剥奪された（p. 6）。さらに「言語」の有無によって政治の領域や政治的共同体を確定することにより、人間は唯一の政治的主体として扱われ、それ以外の動物は政治から排除されてきたのである（pp. 2-5，pp. 18-23）。こうした言語観に基づく動物の排除は、決してニュートラルな線引きではなく、人間と動物の間にある不均衡な権力関係を背景に、人間に固有のコミュニケーションのあり方を一方的に特権化するものである（p. 8，p. 16，p. 26）。

よってメイヤーは、そうした人間中心主義的な言語観を退けて、新しい広義の「言語」を設定した上で、動物のエージェンシーを捉えようとする。ここでの広義の「言語」は、いわゆる人間に限定された狭義の「言語」ではなく、ウィトゲンシュタイン的な言語観である（pp. 6-7，pp. 38-39，pp.

43-47)。ウィトゲンシュタインの言語ゲームでは、辞書的な定義ではなく、既存の実践や社会的コンテクストなどにおける実際的な使われ方に注意が向けられ、そして言葉だけではなく、ジェスチャーや動作などの非言語的表現が射程に収められる（p. 7，pp. 43-47)。こうした広義の言語観に立つことで、人間のロゴスによって一義的に決定される「言語」なるものを拒否し、人間に限定されない多種多様な「言語」のあり方に視野を広げることができる。この言語観であれば、人間に都合のよい形で排除してきた動物のエージェンシーを「声」として拾い上げられるというわけである。

このようにしてメイヤーは、動物のエージェンシーを広義の「言語」にあてはまる発話や行為に見出し、それをコミュニケーションの契機として捉える（pp. 33-35)。実際、動物は、それぞれの方法で話したり、行為することを通じて、さまざまにエージェンシーを発揮している（p. 7，pp. 43-47)。例えば、犬、イルカ、オウム、アフリカゾウ、カラス、鳥類、プレーリードッグなどの多様な動物がそれぞれの方法で複雑なコミュニケーションをとって「話している」ことは、生物学や動物行動学の経験的研究によって明らかにされているところである（pp. 5-6)。そうだとすれば、動物の「声」もまた政治的コミュニケーションを構成するものとして傾聴されうる（p. 4)。メイヤーにいわせれば、これまでの人間中心主義的な民主主義理論は、不均衡な権力によって動物を黙らせてきただけであり、私たちが傾聴さえすれば動物はすでに多種多様な方法で話しているのである（p. 4，pp. 47-60，p. 224)。この認識のもと、メイヤーは、動物からのコミュニケーションを拾い上げられるように、既存の民主主義理論の再考へ向かう。

次に、ドライゼクは、自然のエージェンシーとして生態学的プロセスを強調する。自然は、たしかに人間と同じように意識をもって主体性を発揮するわけではないが、「受動的でもなく、不活性でもなく、無機質でもない」（Dryzek, 2000, p. 148)。むしろ、脱人間中心主義の観点から見れば、「この世界は真に活動的であり、さまざまな意味にあふれている」（p. 148)。これが、行為能力を通じてさまざまな影響を与えるという広義のエージェンシーに依拠する、ドライゼクの自然のエージェンシーへの眼差しである。ただしこのことは、ディープ・エコロジストや神の崇拝者や自然に神聖を見出す人々による緑のスピリチュアリティと混同されるべきでない（p. 148，注 2)。つまり、一方で「不活性の自然」か、他方で「森の妖精」か

という二元論の枠組みで、自然のエージェンシーは捉えられるべきではないのである（p. 148，注 2）。ドライゼクの意図するところは、人間中心主義と神秘主義の両方を避けた脱人間中心主義の観点から、自然のエージェンシーを見ていくということである（p. 148）。

このようにしてドライゼクは、自然のエージェンシーを生態学的プロセスに見出し、それをコミュニケーションの契機として捉える。ドライゼクによれば、人間のような言語的コミュニケーションのほかに、以下の 2 つのコミュニケーション形態が存在している（p. 149）。第 1 に、ボディ・ランゲージ、顔の表情、フェロモンなどを含む、生物による非言語的コミュニケーションである（p. 149）。第 2 に、生息環境における生態学的地位の創造・修正・破壊、あるいは酸素・窒素・二酸化炭素、水の循環といった、生物種の境界線を越境した生態学的プロセスである（p. 149）。ドライゼクにとって、自然のエージェンシーは後者のコミュニケーション形態をとる。つまり、自然における生態学的プロセスは、気候変動や砂漠化、森林伐採、生物種の絶滅などの形でシグナルを発しており、そこにコミュニケーションの契機がありうるということである（p. 149）。ドライゼクにいわせれば、これまでの人間中心主義的な民主主義理論は、こうした自然システムから人間の社会システムへと越境するシグナルを傾聴することを拒絶し、自然からのコミュニケーションを「沈黙（silence）」させてきた（pp. 148-149）。そうした認識のもと、ドライゼクは、自然からのシグナルを拾い上げられるように、既存の民主主義理論の再検討へ向かう。

最後にベネットは、モノのエージェンシーをアッサンブラージュにおけるモノの影響に見出す。モノは、人間の意図や計画を消極的に妨げるだけでなく、それ自体が積極的に行為し、同時に他のモノに作用しながら、世界に影響を生み出している（Bennett, 2010, p. viii; p. 6）。これをベネットは、「活力あるモノ（vibrant matter）」として捉える（p. viii）。この捉え方は、ベネット自身が言及するように、ブルーノ・ラトゥールが提唱するアクターネットワーク理論に近い。アクターネットワーク理論で鍵概念となる「アクタン（actant）」は、相互に結びついたネットワークのなかで影響を生み出したり、出来事の流れを変えたりするような、行為する存在を指している（pp. viii-ix，p. 9）。こうしたベネットの活力あるモノやラトゥールのアクタンの概念が示唆しているのは、人間の設定した意味や目的などの位置

づけを超えて、モノがさまざま影響関係を生み出しているということである（p. 20）。

ベネットは、そうしたモノがアッサンブラージュというネットワークのなかでエージェンシーを発揮していることを指摘し、これをコミュニケーションの契機として捉える。「アッサンブラージュ（assemblage）」とは、ベネットがドゥルーズとガタリから継承した概念であり、「あらゆる種類の活力あるマテリアルから……構成される暫定的な集合体」を指す（p. 23）。このアッサンブラージュは、それを構成するモノあるいはアクタンから生じる絶え間ないエネルギーに揺るがされながら、ネットワーク的な集合体として創発的なエージェンシーを発揮する（pp. 23-24）。一例として、「人間」もまた、骨のミネラル、血液中の鉱物、神経系の電気など、さまざまなモノを含むアクタンが集合した、ノンヒューマンとの異種混成的なアッサンブラージュとしてエージェンシーを行使していると理解される（p. xvii, p. 11）。そのほかに大規模なアッサンブラージュの例として、アメリカで起きた 2003 年の大停電の事象が挙げられている（p. xvii, pp. 24-28）。ここでは、人間や、社会的･法的･言語的構築物に加えて、電子、木々、風、電磁場などのノンヒューマンがアッサンブラージュを構成して、大停電という創発的エージェンシーを発揮したのである（p. 24）。そうしたアッサンブラージュとしてのネットワークに関与する人間やその意思は、もはや唯一のアクタンでもなければ、常に最も重要なアクタンであるとも限らない（p. 37）。このようにノンヒューマンのネットワークのなかに人間を位置づけることで、ベネットは、活動する人間と沈黙したノンヒューマンという非対称的な二元論を克服している。ただし、ベネットがニューマテリアリズムの立場から目指している政治的目標は、人間を含む「アクタンらの完全な平等ではなく、〔アクタンという〕メンバー間のコミュニケーションのチャンネルを増やした政体（polity）」である（p. 104.〔〕は引用者による補足）。すなわち、ベネットが意図するところは、ノンヒューマンから独立した人間主体にコミュニケーションを求める姿勢を乗り越えて、アッサンブラージュという異種混成的なネットワークに関与するアクタンによるエージェンシーの響きあいにコミュニケーションを見出すということである。そのためにベネットは、自然、人体、人工物などにおいて横断的に活動するモノのエージェンシーを捉えられるように、既存の民主主義理

論の刷新へ向かう。

それでは、以上のようなメイヤー、ドライゼク、ベネットの「ノンヒューマンのエージェンシー」は、どのような位置関係にあるのであろうか。メイヤーは「動物の発話や行為」、ドライゼクは「生態学的プロセス」、そしてベネットは「アッサンブラージュにおけるモノの影響」という三者三様のエージェンシーを見出した。興味深いことに、いずれの政治理論家も、ノンヒューマンのエージェンシーにコミュニケーションの契機を見出す点で共通している。しかし、そのコミュニケーションの形態が異なる位置づけになっていることは、指摘されるべきであろう。このことは、ドライゼクのコミュニケーションの形態を参考にして整理することで明らかになる。ドライゼクは、コミュニケーションの形態として、第 1 に人間の言語、第 2 に動物や植物などの生物による非言語的コミュニケーション、第 3 に生態学的プロセスなどの無生物による非言語的コミュニケーションを提示した[15)]。

そこでの第 1 の人間の言語は、アリストテレスの政治的動物を支えるロゴス中心的な言語観として、メイヤーが指摘するものにあたる。その意味で、ドライゼクのコミュニケーション形態において動物のコミュニケーションが「非言語」として扱われていることは、メイヤーによって批判されるであろう。こうしたドライゼクの枠組みに、メイヤーの見出すエージェンシーをあえて重ねるならば、第 1 と第 2 をフラットに接合した広義の「言語」の枠組みにおいて、人間と人間以外の動物のコミュニケーションを位置づけることになる。ここで注意すべきは、メイヤーが政治に関連するエージェンシーを決定する際、主観性を基礎にした倫理的基準に依拠していることである。このようなメイヤーの態度は、次のような一文に顕著である。すなわち、「言うまでもなく、例えば、動物園のオランウータンの行為と、雷鳴（thunder）の間には、道徳的に大きな違いがある」（Meijer, 2019, p.

15）ドライゼクによる民主主義のコミュニケーション形態の分類は、近年の論文において、さらに掘り下げられている（Romero & Dryzek, 2021）。ドライゼクの分類では、第 3 のコミュニケーション形態において自然によるシグナルを強調しているが、本稿は、人工物のシグナルも第 3 のコミュニケーション形態としている。また、2021 年論文において、ドライゼクが記号学（semiotics）を軸にコミュニケーション形態を論じていることは、人間主体による解釈を前提とする記号学にモノのエージェンシーが完全には還元されえないとするベネットの立場と、潜在的に衝突している（Bennett, 2010, p. 5）。

127)。つまり、オランウータンにおいては、まずもって自らの生息条件を向上させようとする主観的意識があり、そこに人間と動物の間の搾取構造が背景として横たわっているゆえに、オランウータンのエージェンシーは道徳的に重要であり、同時に政治的にも重要と想定されている（p. 127)。反対に、雷鳴においては、それらが欠如しているゆえに道徳的にも政治的にも重要でないのである（p. 127)。このようにして、メイヤーは、前者のエージェンシーを政治や民主主義に関係のあるものとし、その代わりに後者のエージェンシーを切り捨てている。結果として、第2のコミュニケーション形態のなかでも、植物による非言語的コミュニケーションが脱落する。さらに、雷鳴のような無生物が発する第3の非言語的コミュニケーションは、政治において無関係であることになる。

他方、こうしたメイヤーの理論的アプローチとは対照的に、ドライゼクは、自然システムからのシグナルを第3の無生物のコミュニケーションとして政治の文脈で拾い上げようとする。先ほどのメイヤーの主張は、まずもって倫理的出発点があり、その上で人間による搾取構造がある場合に、政治に関与するコミュニケーションの要件を満たすという理路をとっていた。そうした条件づけのもとに、メイヤーは、オランウータンと異なり、雷鳴には道徳的価値や人間による搾取構造がないことを自明視している。これに対して、ドライゼクは、個別的存在に対する倫理的出発点を前提とすることなく、またシステミックな次元で人間による自然の植民地化という搾取構造を指摘することで、人間と自然の間に政治的関係性を特定している（Dryzek, 2000, p. 153)。したがって、ドライゼクの理論的アプローチであれば、雷鳴も、例えば気候変動などの特定の場合に、政治的なシグナルとして捉えることが可能ということになる。以上のようなメイヤーとドライゼクの対立の裏側には、メイヤーによる個別的存在の言動への注目（オランウータンや雷鳴それ自体）と、ドライゼクによるシステミックな生態学的プロセスへの注目（雷鳴を含む自然システムの活動）という相違点がある。それゆえに、後者の立場に立つドライゼクは、システミックな自然のシグナルを政治の枠組みにおいて傾聴されるべき声として捉えているが、その裏面として、メイヤーの強調していた第二のコミュニケーション形態にあたる個別具体的な動物や植物のシグナルを後景化させてもいる。

上記の両者の対立とは別のところで、ベネットは、ニューマテリアリズ

ムに独特なオルタナティブなコミュニケーションのあり方を示す。ベネットは、アッサンブラージュという異種混成的なネットワークのなかでエージェンシーを発揮しているアクタン間のコミュニケーションに光をあてていた。こうしたベネットのニューマテリアリズムの観点は、人間というミクロなアッサンブラージュから、大停電というマクロなアッサンブラージュなど、さまざまなスケールのアッサンブラージュにおけるアクタンのコミュニケーションに対応している。その意味で、個別的な動物のエージェンシーに焦点を絞るメイヤーとも、自然システムのエージェンシーに焦点を絞るドライゼクとも異なり、人間・動物・自然・人工物を含むさまざまなモノのエージェンシーを捉えている。したがって、アッサンブラージュおけるコミュニケーションの契機は、潜在的には、第 1 の人間の言語、第 2 の動物や植物などの生物による非言語的コミュニケーション、第 3 の生態学的プロセスなどの無生物による非言語的コミュニケーションを全て包含している。既述のように、大停電の事象では、人間、社会的・法的・言語的構築物、そして電子、木々、風、電磁場などがアッサンブラージュを構成しているため、それらの間には当然、人間の言語的コミュニケーション、動植物による非言語的コミュニケーション、そして無生物による非言語的コミュニケーションなど、すべての行為能力者によるコミュニケーションがありうるのである。ただし、その中でも特に、通常ではコミュニケーションとして考えられづらく、それゆえに捨象されがちなモノのエージェンシーが、コミュニケーションの契機として強調されている度合いが強い。したがって、特にベネットにおいて焦点が当たっているのは、第三のコミュニケーション形態と言える。こうしたベネットの立場は、メイヤーよりもドライゼクに近い。しかし、通常自然とは考えられない食べ物や電気などのノンヒューマンのエージェンシーを捉えうる点で、ベネットの議論は、ドライゼクを越える射程を有している。換言すれば、ベネットは、メイヤーやドライゼクと異なり、コミュニケーションの内実についてあえて焦点を絞っていないがゆえに、さまざまなエージェンシーの契機を捉える潜在的可能性がある。

以上の比較から明らかなように、第 2 の論点の「ノンヒューマンのエージェンシー」は、第 1 の論点においてそれぞれの民主主義理論がいかなるノンヒューマンを想定するかに応じて、異なっている。同様に、本論点の

「ノンヒューマンのエージェンシー」の相違点は、第 3 の論点である「民主主義理論の再考」へも継承されていく。

第 5 節　論点（3）民主主義理論の再考

第 3 の論点は、「民主主義理論の再考」である。これまでの 2 つの論点において、それぞれ異なる理論的アプローチの論者が、いかなるノンヒューマンに注目し、そうしたノンヒューマンにいかなるエージェンシーを見出してきたかを整理してきた。こうした議論が共通して示しているのは、脱人間中心主義的な観点に立てば、政治や民主主義に潜在的に関与するノンヒューマンとのコミュニケーション的契機が見出せるということである。したがって、これらの論者は、そうした契機を無効にする人間中心主義を乗り越えることを意識しながら、既存の民主主義理論の再検討を進めていく。

まず、メイヤーは、人間中心主義的な言語観を乗り越えた上で、熟議におけるコミュニケーション概念を人間の言語からインタースピーシーズな「言語」にまで広げたという点で、熟議民主主義を拡張的に再考する。メイヤーが乗り越えようとしているのは、政治から動物を排除する人間中心主義的な言語観である。上述のように、政治理論の伝統においては、人間の言語を使用した「話す（speak）」能力こそが、政治コミュニティにおける政治的アクターとして認められる必要条件であると考えられてきた（Meijer, 2019, p. 3）。そこでの言語観は、理性あるいはロゴスを軸にした人間の言語のみを「言語」として扱うがゆえに、人間の言語を使用しない動物を政治的共同体の範囲から除外してきたのであった（p. 3）。加えて、この包摂と排除をめぐる境界線は、人間の言語の中で人間によって一方的に決められてきたことでもある（p. 3）。メイヤーは、以上のような人間中心主義的な言語観を基礎にした政治的伝統が、ハーバーマスの熟議民主主義をはじめとする熟議の理性的なコミュニケーション像にも通底していることを問題視する（p. 3，p. 216）。

したがって、熟議における従来的な政治的コミュニケーションは、脱人間中心主義的な言語観に基づいて、インタースピーシーズへと開かれなければならないことを、メイヤーは主張する（pp. 216-222）。まずメイヤーは、ヤング（Young, 2000）の熟議の捉え方を参照しながら、周縁化されてき

た人々を包摂することと、想定されるコミュニケーションのあり方を再考することが同時的であることを指摘する（Meijer, 2019, p. 224）。第 2 の論点で論じたように、メイヤーからすれば、「話すことが人間の言語で話すことと理解されているから、彼ら〔動物〕は話せない」だけであり、すでに動物はそれぞれの方法で話しているのであった（p. 224.〔〕は引用者による補足）。よって、求められているのは、ハーバーマスが設定した理性の基準を満たすものとして動物を取り上げるのではなく、彼らに固有の理性や話し方を考慮しながら、動物の声を排除しないコミュニケーションのあり方を動物と共に考え直していくことである（pp. 223-224）。

そのためにメイヤーは、インタースピーシーズな熟議における動物との政治的コミュニケーションに関して、詳細な特徴については動物との関わりあいの中で発展していくべきだとしつつも、以下の 4 つの重要な側面をたたき台として提出する。すなわち、時間という側面では、一度きりの会話と集合的決定で完結するのではなく、人間と動物が互いの立場を学んで時間をかけて関係を調整していく、継続的なプロセスという性質を帯びる（p. 227）。空間という側面では、議会や市役所といった人間の政治的空間を超えて、実際に人間と動物の政治的相互作用が起きている空間が政治的空間として捉えられる（p. 228）。物という側面では、言葉だけでなく、行為、身体的なジェスチャー、特定の物を媒介したコミュニケーションなど、身体化された相互作用を含む（pp. 225-226，p. 229）。そして関係性という側面では、人間とそれ以外の動物の関係はフラットにもつれあっていることを認める（p. 230）。これらの特徴をもつ政治的コミュニケーションをもとに、さまざまな動物が政治の文脈において発する多様な声を傾聴し、政治的制度や実践を変革していくのが、メイヤーのインタースピーシーズな熟議民主主義である（p. 162，p. 220，pp. 231-234）。

続いて、ドライゼクは、リベラルな人間中心主義を乗り越えた上で、熟議におけるコミュニケーション概念を人間の言語から自然のエージェンシーにまで広げるという意味で、熟議民主主義を拡張的に再考する。ドライゼクが乗り越えようとしているのは、「人間とノンヒューマンの世界の間にある強固な境界線」である（Dryzek, 2000, p. 152）。従来のあらゆる民主主義理論は、民主主義が人間主体のためのものだということを一貫して自明視してきた（p. 6）。とりわけ、自由民主主義に埋め込まれたリベラル

な人間中心主義は、理性的存在ということを根拠に、人間だけに政治的地位を付与し、人間の利害のみを価値の尺度として採用してきた（p. 147）。しかし、この枠組みに囚われてしまうことにより、人間の世界と自然の世界がエコロジー的に相互連関しているにもかかわらず、自然とのコミュニケーションの契機を自閉的に断絶･捨象してしまう（p. 146, p. 152）。また、リベラルな枠組みに限定された熟議民主主義にも、こうした人間中心主義的な「自閉症（autism）」は継承されている（p. 146, p. 148）。つまり、多くのリベラリストと同様に、ハーバーマスにとって政治の文脈で重要となる唯一の存在は、対話の主体となる人間であった（p. 148）。

そうした「自閉症」に囚われたハーバーマスに対して、ドライゼクは、脱人間中心主義的な観点から、行為能力者（agents）としての諸存在に向けて、コミュニケーション、そしてコミュニケーション的合理性を拡張していく（p. 148）。すでに第 2 の論点「ノンヒューマンのエージェンシー」で述べたように、気候変動や生物種の絶滅といった自然の世界から発せられるシグナルには、さまざまな意味が潜在的に込められており、そこに自然とのコミュニケーション的契機を見出すことは可能である。むしろ問われているのは、人間が自然を無言の客体として捉え、それらの声を傾聴しないことで、自然を黙らせているということであった。そうであれば、人間主体のコミュニケーションに対して傾聴し解釈するのと同じ敬意を込めて、行為能力者としての自然によるコミュニケーションに対して傾聴し解釈していく営みもありうる（p. 149）。それは、ハーバーマスのいうような道具的合理性の働きではなく、コミュニケーション的合理性の働きである（p. 149）。このように「ハーバーマスからコミュニケーション的合理性を救出」した上で、自然システムから越境してくるシグナルに傾聴して人間の社会制度や実践を変革していくのが、ドライゼクのエコロジー的熟議民主主義である（p. 148）。

最後に、ベネットにおける民主主義理論の再考は、既存の二元論的な存在論を乗り越えて、活力あるモノのエージェンシーを考慮できるように民主主義における存在論を刷新することを通じて行われる。ベネットが乗り越えようとしているのは、人間のみを政治的主体として捉えることで、モノを舞台背景にするような、既存の民主主義の存在論である。これまでの政治理論や民主主義理論において、政治はもっぱら人間の領域であるとい

うことが自明視され、そこに関与する自然･人体･人工物などのノンヒューマンのエージェンシーは捨象されてきた（Bennett, 2010, p. xvi）。実際、モノのエージェンシーは、たとえ人間の政治に対して重大な影響を与えていても、人間の行動、意味、議題、あるいはイデオロギーなどとすり替えられて、人間の事象として表象されてしまう（p. x）。そこでは、活力あるモノは考察から排除され、ノンヒューマンのエージェンシーが人間のエージェンシーに縮減されているのである（p. xv）。この意味で、従来の民主主義理論は、動的に活動する人間主体と、静的な客体としてのノンヒューマンという二元論的な存在論を前提としてきた（p. xiv）。

このような民主主義理論に対して、ベネットは、人間とノンヒューマンの異種混成的なアッサンブラージュを、民主主義の存在論として位置づける（p. 108）。ニューマテリアリズムの観点からすれば、さまざまな活力あるモノは、エージェンシーを行使するアッサンブラージュのネットワークに参加したり離れたりしながら、相互に影響を与えあっている（p. 107）。ベネットは、そうしたノンヒューマンのエージェンシーを民主主義の枠組みでも検討できるようにするために、民主主義理論の適切な分析単位を、人間の個人や集団ではなく、人間とノンヒューマンから構成される異種混成的なアッサンブラージュに置き換える（p. viii, p. 108）。こうしてアッサンブラージュの存在論に依拠することで、話す主体と沈黙した客体という分断を乗り越えて､それらを「一連の異なる傾向性と多様な能力」をもった連続的な存在として捉えることができる（p. 108）。このような民主主義における存在論の刷新は、人間、ウイルス、動物、テクノロジーなどの相互作用が強くなっている現代において、ノンヒューマンのエージェンシーに傾聴して対応していくために重要な役割を果たしうるのである（p. 108）。以上のように、ニューマテリアリズムに独特な視座から、民主主義の存在論の刷新を通じて政治におけるノンヒューマンの役割を浮き彫りにするのが、ベネットのニューマテリアリズムの民主主義といえる。

以上を踏まえて、メイヤー、ドライゼク、ベネットにおける「民主主義理論の再考」の方向性は、どのように相互に位置づけられるであろうか。メイヤーとドライゼクは、ハーバーマスに代表される既存の熟議民主主義が人間中心主義的なコミュニケーションの枠組みを前提にしていることを指摘して、ともにノンヒューマンとのコミュニケーションの契機を熟議の

枠組みに取り入れようとしている。両者は、動物とのコミュニケーションの強調と自然とのコミュニケーションの強調という違いはあれど、基本的に既存の熟議民主主義を拡張的に再考するという点に関しては、大枠として共通していると見てよいであろう。

これに対して、ベネットのアプローチは、ニューマテリアリズムの観点から民主主義理論の存在論を見直すという点で、民主主義の部分的な修正・補強というアプローチをとるメイヤーやドライゼクとは一線を画するものと言える。既存の民主主義理論は、人間ならざるノンヒューマンを背景にして活動する人間主体という存在論を、自明視してきた。これに対してベネットは、そもそも民主主義の主体がさまざまなアクタンから構成されていること、つまり主体は常にすでに人間とノンヒューマンとの異種混成的なアッサンブラージュであることを強調することによって、民主主義の主体像を捉え直していくのであった。

こうした存在論の次元におけるラディカルな再検討に対して、メイヤーとドライゼクはどこまで踏み込んでいるのであろうか。まずメイヤーは、次のような意味で、保守的なアプローチとして位置づけられるであろう。つまり、メイヤーは、人間のように主観性をもつ動物を政治の枠組みに招き入れている点で一定の拡張をしているものの、主観的世界をもたないとされる植物や無生物などのノンヒューマンを政治の舞台背景として排除しており、人間をベースにした民主主義の存在論自体をそれほど更新できているわけではない。たしかにメイヤーは、人間と動物が種を越えて相互に影響しあいながら、共通の世界を形成してきたことに言及している点では、関係性を重視した存在論を示唆している（Meijer, 2019, p. 220）。しかし、主観性を基準にして人間の枠組みに人間以外の動物を招き入れる姿勢は、保守的な相対化の域を脱しておらず、依然として存在論の刷新という観点では消極的である[16]。

次に、ドライゼクの立論は、メイヤーとは異なり、人間の社会的側面と

16）注 14 で言及したように、メイヤーは、動物の知覚（sentience）などの「個別的資質の解釈」をめぐる動物倫理の枠組みと、人間と動物との「関係性（relation）」をめぐる枠組みの両方に足を置いており、この意味でメイヤーは二面性をもっている。本稿は、メイヤーを（本人は否定するかもしれないが）基本的に前者の枠組みにコミットする論者として扱っている。事実、メイヤーの文献全体を通じて、基本的に哺乳動物などに主眼が置かれており、後者の枠組みはミミズを包摂するための例外的な理路であると捉えるのが適切であるように思われる。

生態学的側面の両面を捉えており、民主主義の存在論を再考する理論的潜在性を備えている（Dryzek, 2000, pp. 149-151）。つまり、一面では政治・社会システムの構成員でもあり、他面では生態系・自然システムの構成員でもあるという人間の両面性を捉えている点で、ドライゼクは、政治・社会システムの枠組みに一部の動物を招き入れるメイヤーを越えているということである。ここでのドライゼクの生態系・自然システムの考え方は、人類と自然が同じ生態学的存在としてエコロジー的世界にフラットに埋め込まれていることを認め、また両者の間で、酸素・炭素・水の循環などの生態学的プロセスが種を越境して連続的に共有されていることを認めている意味で、ノンヒューマンを背景化することを避けるベネットの方向性に近い。このドライゼクの立場が示唆しているのは、人間が、社会における市民であると同時に、あるいはそれ以前に、生態系を構成するメンバーであるということである。そのような存在論的想定があるからこそ、自然とのコミュニケーションという発想も可能であったと言えよう。この意味で、ドライゼクの存在論は、既存の人間的な枠組みを脱構築する方向に向かっている。

ただし、生態学的な存在論の次元についてドライゼクの議論は、本稿で取り上げた 2000 年の著作（Dryzek, 2000）において徹底化されていないことも確かである。すなわち、ドライゼクは、人間の両面性を捉えながらも、社会システムの構成員としての人間の側面を強調した民主主義理論を中心に展開しているため、現状では生態学的存在としての人間の存在論が後景化している。このことは、ドライゼクが、ノンヒューマンからのシグナルを人間システムの越境に際して「解釈」されるものとして位置づけ、そしてその時に「存在の政治（politics of presence）」から「アイデアの政治（politics of ideas）」へと移行することを指摘する部分に見て取れる（p. 154）。そこでノンヒューマンのシグナルを受けとる人間は、自然システムに生きる人間ではなく、政治システムに生きる人間となっており、ドライゼクの理論的重心が政治システムに傾いていることが示唆されている。ドライゼクの考察は、エコロジー的危機への対応として、人間の政治制度における集合的決定を考慮する上で重要なものである。しかし、そのように政治・社会システムの一員としての人間に重心を置く考察とは別に、生態学的存在としての人間に重心を置いた方向性の議論も理論的にはありうるのではない

か。そしてその延長線上に、ベネットのニューマテリアリズムのように、人間とノンヒューマンの連続性や関係性を存在論の次元からラディカルに追求する議論が接続されうるということを指摘しておきたい。

結論

本稿では、メイヤーのインタースピーシーズな民主主義、ドライゼクのエコロジー的民主主義、ベネットのニューマテリアリズムの民主主義を取り上げながら、ノンヒューマンを政治的主体として包摂する民主主義の研究動向を整理してきた。その際、「ノンヒューマンの包摂」、「ノンヒューマンのエージェンシー」、「民主主義理論の再考」という 3 つの論点、つまり、どのようなノンヒューマンをいかに包摂するのか、そして包摂したノンヒューマンにいかなるエージェンシーを見出し、このエージェンシーを排除する人間中心主義的な民主主義理論をいかに再考していくのかという論点を取り上げた。メイヤーは、動物の権利論に根ざしながら、幅広い動物を政治的市民として包摂し、動物の言語や行為にコミュニケーションの契機を見出し、それを傾聴しうる熟議民主主義へと修正を目指した。ドライゼクは、エコロジー的関心のもとに、自然システムを包摂し、その生態学的プロセスにコミュニケーションの契機を見出しながら、それに傾聴しうる熟議民主主義を構想する。最後にベネットは、ニューマテリアリズムの観点に立って、あらゆるモノを包摂しながら、それらが相互に及ぼすエージェンシーを捉えて、存在論の次元から民主主義の再検討を行っていた。

さらに、これら 3 つの民主主義を論点に沿って比較するなかで、次のような対立関係が明らかになった。第 1 に、「ノンヒューマンの包摂」という論点では、どこまで包摂するかをめぐって、「動物」＜「自然」＜「モノ」という相違点があり、さらにノンヒューマンを権利を有する存在として包摂するかをめぐって、メイヤー対ドライゼク＋ベネットという対立軸が浮き彫りになった。第 2 に、「ノンヒューマンのエージェンシー」という論点では、ノンヒューマンのコミュニケーション形態として、メイヤーが動物のエージェンシーを広義の「言語」的コミュニケーションとして（形態 1 ＋ 2）、ドライゼクが自然のエージェンシーを非言語的コミュニケーションとして（形態 3）、ベネットがモノのエージェンシーを非言語的コミュ

ニケーションとして（形態 3）捉える点で異なっている。とりわけ、自然のエージェンシーを政治に関与するコミュニケーションとして包摂／排除するかをめぐって、メイヤーとドライゼクの間で明確な対立関係が生じていることがわかった。第 3 に、「民主主義理論の再考」という論点において、一方では、メイヤーとドライゼクがノンヒューマンとのコミュニケーションを熟議に包摂することで「熟議民主主義の拡張」を目指す点で共通しており、他方で、ベネットは存在論の次元から民主主義を捉え直すことを志向することが示された。特に、民主主義の存在論に焦点を当てれば、メイヤーは人間の枠組みを維持しており、ドライゼクは存在論を問い直す潜在的可能性をもっており、ベネットはラディカルにこれを追求しているという対立関係も明らかにされた。以上のようにして、本稿は、代表的文献の検討作業を通してではあるが、ノンヒューマンをめぐる民主主義理論が一枚岩ではなく、その間に潜在的な対立関係があることを示しながら、「ノンヒューマンとのデモクラシー」論の研究動向を紹介・検討してきた。

このようなノンヒューマンをめぐる野心的な民主主義研究を、私たちはいかに受け止めればよいのであろうか。率直に言って、「突飛」という印象を受ける人々も多いのではないだろうか。それはある意味で当然のことである。なぜならば、本稿で取り上げた諸研究が応答しようとしているのは、既存の民主主義理論が自明視してきた常識や前提を揺るがす先端的諸課題だからである。そうした諸課題に直面する現代世界において、人間を例外とする思考様式を問い直し、あらためてノンヒューマンとの関係性を考察しながら、新しい民主主義のあり方を模索することは、民主主義が本質的に論争的な概念であることを考慮すれば不思議なことではなかろう。民主主義理論の比較的浅い歴史を振り返れば、民主主義は、支配階級から被支配階級、男性から女性、マジョリティからマイノリティへと新たな「デモス」に開かれていくなかで、絶えず問い直され変容してきた。つまり、こうした流れの最前線として、人間からノンヒューマンへの「デモス」の拡張が問われているということなのである。この拡張は、民主主義理論において大きな跳躍になるだけに、慎重な検討作業が求められることは間違いない。しかし私たちの従来的な思考枠組みによって、そうした拡張を最初から否定することは、ある意味で「支配階級」の立場から民主主義の可能性を限定することにもなるだろう。したがって、今後、ノンヒューマン

をめぐる民主主義理論は、一方では既存の人間中心主義的な枠組みを批判的に問い直しつつ、他方ではノンヒューマンを民主主義に包摂する難しさを慎重に検討していくなかで、試論的な段階を越えてさらなる発展を遂げることが期待されているのである。

参考文献

Asenbaum, H.（2021）. Rethinking digital democracy: From the disembodied discursive self to new materialist corporealities. *Communication Theory, 31*（3）, 360-379.

Asenbaum, H.（2023）. *The politics of becoming: Anonymity and democracy in the digital age*. Oxford University Press.

Asenbaum, H., Machin, A., Gagnon, J. P., Leong, D., Orlie, M., & Smith, J. L.（2023）. The nonhuman condition: Radical democracy through new materialist lenses. *Contemporary Political Theory, 22*（4）, 584-615.

Ball, T.（2006）. Democracy. In A. Dobson & R. Eckersley（Eds.）, *Political theory and the ecological challenge*, 131-147. Cambridge University Press.

Bennett, J.（2010）. *Vibrant matter: A political ecology of things*. Duke University Press.

Celermajer, D.（2024, February, 20）. How can deliberative democracy listen to nonhumans?［Seminar Presentation］. The Center for Deliberative Democracy and Global Governance 10th anniversary seminar series: 10 big questions on deliberative democracy, Canberra, Australia.

Connolly, W. E.（2013）. The'new materialism'and the fragility of things. *Millennium, 41*（3）, 399-412.

Connolly, W. E.（2019）. *Climate machines, fascist drives, and truth*. Duke University Press.

Coole, D., & Frost, S.（2010）. Introducing the new materialisms. In D. Coole and S. Frost（Eds.）, *New materialisms: Ontology, agency, and politics*, 1-46. Duke University Press.

Dobson, A.（2010）. Democracy and nature: Speaking and listening. *Political Studies, 58*（4）, 752-768.

Dobson, A.（2014）. *Listening for democracy: Recognition, representation, reconciliation*. Oxford University Press.

Dobson, A.（2022）. Emancipation in the Anthropocene: Taking the dialectic seriously. *European Journal of Social Theory, 25*（1）, 118-135.

Donaldson, S.（2020）. Animal agora: Animal citizens and the democratic challenge. *Social*

Theory and Practice, 46（4）, 709-735.

Donaldson, S., & Kymlicka, W.（2011）. *Zoopolis: A political theory of animal rights*. Oxford University Press.

Donaldson, S., & Kymlicka, W.（2014）. Animals in political theory. In K, Linda（ed.）, *The oxford handbook of animal studies*, 43-64. Oxford University Press.

Donaldson, S., Vink, J., & Gagnon, J. P.（2021）. Realizing interspecies democracy: The preconditions for an egalitarian, multispecies, world. *Democratic Theory, 8*（1）, 71-95.

Dryzek, J. S.（1987）. *Rational ecology: Environment and political economy*. Basil Blackwell.

Dryzek, J. S.（2000）. *Deliberative democracy and beyond: Liberals, critics, contestations*. Oxford University Press.

Dryzek, J. S., & Pickering, J.（2019）. *The politics of the Anthropocene*. Oxford University Press.

Eckersley, R.（1992）. *Environmentalism and political theory: Toward an ecocentric approach*. New York University Press.

Eckersley, R.（2004）. *The green state: Rethinking democracy and sovereignty*. The MIT Press.

Eckersley, R.（2017）. Geopolitan democracy in the Anthropocene. *Political studies, 65*（4）, 983-999.

Eckersley, R.（2020）. Ecological democracy and the rise and decline of liberal democracy: Looking back, looking forward. *Environmental politics, 29*（2）, 214-234.

Goodin, R. E.（1992）. *Green political theory*. Polity Press.

Goodin, R. E.（1996）. Enfranchising the Earth, and its alternatives. *Political studies*, *44*（5）, 835-849.

Kurki, M.（2020）. Coronavirus, democracy and the challenges of engaging a planetary order. *Democratic Theory, 7*（2）, 172-179.

Latour, B.（2004）. *Politics of Nature*. Harvard University Press.

Lysaker, O.（2024）. *Ecological democracy: Caring for the Earth in the Anthropocene*. Routledge.

Meijer, E.（2016）. Interspecies democracies. In B. Bovenkerk & J. Keulartz（eds.）, *Animal ethics in the age of humans: Blurring boundaries in human-animal relationships*, 53-72. Springer.

Meijer, E.（2019）. *When animals speak: Toward an interspecies democracy*. New York University Press.

Milburn, J.（2022, June 17）.［Review of the book *When animals speak: Toward an interspecies*

democracy, by E. Meijer]. *Metapsychology Online Reviews*. https://hdl.handle.net/2134/19435577.v1

Pickering, J., Bäckstrand, K., & Schlosberg, D.（2020）. Between environmental and ecological democracy: Theory and practice at the democracy-environment nexus. *Journal of Environmental Policy & Planning, 22*（1）, 1-15.

Plumwood, V.（1995）. Has democracy failed ecology? An ecofeminist perspective. *Environmental Politics, 4*（4）, 134-168.

Romero, J., & Dryzek, J. S.（2021）. Grounding ecological democracy: Semiotics and the communicative networks of nature. *Environmental Values, 30*（4）, 407-429.

Smith, J. L.（2017）. I, river?: New materialism, riparian non-human agency and the scale of democratic reform. *Asia Pacific Viewpoint, 58*（1）, 99-111.

Young, I. M.（2000）. *Inclusion and democracy*. Oxford University Press.

スー・ドナルドソン／ウィル・キムリッカ 著、青木人志／成廣孝 監訳（2016）『人と動物の政治共同体――「動物の権利」の政治理論』尚学社.

ロビン･エッカースレイ 著、松野弘 監訳（2010）『緑の国家――民主主義と主権の再考』岩波書店.

川村覚文（2020）「ノンヒューマン的転回と『モノ』たちの政治――ジェーン・ベネット『諸システムとモノたち』について」『現代思想 2021 年 1 月号 特集：現代思想の総展望 2021――実在・技術・惑星』青土社.

栗原亘 編著、伊藤嘉高／森下翔／金信行／小川湧司 著（2022）『アクターネットワーク理論入門――「モノ」であふれる世界の記述法』ナカニシヤ出版.

桑田学（2005）「エコロジー的熟議民主主義への潮流」『公共研究』第 2 巻第 2 号，pp. 238-282.

近藤祉秋／吉田真理子（2021）「人間以上の世界から『食』を考える」近藤祉秋・吉田真理子編『食う、食われる、食いあう』青土社.

佐藤竜人（2021）「新しい物質主義の展開と可能性」『総合人間学研究』第 15 号 pp. 9-22.

瀧章次（2011）「『緑』の民主主義の可能性」『城西国際大学紀要』第 19 巻第 7 号，pp. 1-14.

田村哲樹（2023）「『民主主義の徹底化』か？――無意識（データ）とノンヒューマンをめぐって」［シンポジウム報告］名古屋大学人文学研究科附属人文知共創センター設立記念シンポジウム〈けさひらく人文知〉（名古屋大学、2023 年 3 月 29 日）.

土佐弘之（2020）『ポスト・ヒューマニズムの政治』人文書院.

福永真弓（2023）「魚のまなざす海――多種間の政治と人間であること」『政治思想と環境』第 23 号，pp. 118-143.

前田幸男（2021）「ノン・ヒューマンとのデモクラシー序説――ヒトの声だけを拾えば済む時代の終焉へ」『年報政治学』2021-II 号，pp. 326-349.

前田幸男（2023）『「人新世」の惑星政治学――ヒトだけを見れば済む時代の終焉』青土社.

増渕隆史（2012）「エコロジー的民主主義が示す環境倫理学の課題」『北大文学研究科紀要』第 137 号，pp. 1-22.

丸山正次（2006）『環境政治理論』風行社.

丸山正次（2021）「言説的転回としての熟議民主主義――ジョン・S・ドライゼクのエコロジー的熟議民主主義理論」『法学論集』第 87 号，pp. 41-85.